

Exploration of Inclusion toward the Aging-in-place of Older Adults Living with Dementia : Focusing on Memory Care Conducted by “Bridges” in the United States

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00006115

資料

高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに
向けた包摂的活動

—アメリカ合衆国における「ブリッジ」のメモリーケアを中心に—

鈴木七美*

Exploration of Inclusion toward the Aging-in-place of Older Adults Living with
Dementia: Focusing on Memory Care Conducted by “Bridges” in the United States

Nanami Suzuki

本稿は、アメリカ合衆国において、高齢認知症者の孤立感の緩和と「エイジング・イン・プレイス」に向けて開発されてきた「メモリーケア」について検討したものである。この実践は、「ブリッジ Bridge」（繋ぐ者）と呼ばれるボランティアが、「バディ Buddy」（仲間）と呼ばれる高齢認知症者と対面の交流を続けることによってなされる。2005年以降、メモリーケアは、非営利組織メモリーブリッジと中等・高等学校の連携により、カリキュラムの一環として続けられ、2006年から2010年に、シカゴ・メモリーブリッジ・イニシアチブのもとで、7,500人以上の中等・高等学校の生徒と認知症高齢者が、少なくとも三か月以上一対一で交流してきた。こうした場で、バディは、ブリッジの指導者・教師と位置づけられている。メモリーケアは、100以上のホスピスにおいても、スタッフやボランティアと認知症者が交流する方途を探ってきた。本稿は、2013年から高齢化率の高いフロリダ州の継続ケア退職者コミュニティと連携し始められた実践をとりあげ、現地調査（2015年11月17日～12月3日）に基づいて、ブリッジたちの経験を検討し「メモリーケア」の意味に考察を加えた。

*国立民族学博物館研究戦略センター・総合研究大学院大学

Key Words: older adults with dementia or cognitive impairments, emotional isolation, aging-in-place, memory care, Bridge, Buddy, United States

キーワード: 認知症高齢者, 感情的孤立, エイジング・イン・プレイス, メモリーケア, ブリッジ (繋ぐ者), バディ (仲間), アメリカ合衆国

This article explores the development of so-called “memory care” in the United States, which aims to diminish the emotional isolation of older adults with dementia and promote their aging-in-place by connecting them to other people. The practice has been carried out in certain cases via face-to-face meetings of volunteers known as “Bridges” (persons who connect) and older adults with dementia known as “Buddies” (fellows).

Since 2005, exchanges for memory care have been practiced under a curriculum conducted in collaboration between a nonprofit organization (NPO) called Memory Bridge and secondary schools (i.e., junior and senior high schools). From 2006 to 2010, the Chicago Memory Bridge Initiative (CMBI) connected over 7,500 secondary students with older adults suffering from dementia through one-to-one relationships that lasted a minimum of three months. The Buddies were positioned as the guides and teachers of the Bridges in meetings devoted to memory care. Memory Bridge also trained over one hundred hospice staff members and volunteers how to associate with people with dementia in emotionally nourishing ways.

The article investigates the experiences of the Bridges and considers the meaning of memory care by focusing on the practice, conducted since 2013, at a Continuing Care Retirement Community (CCRC) in Florida—where the aging rate is higher than the U.S. average—based on exploratory fieldwork research conducted in November and December 2015.

はじめに—認知症と孤立の問題	2.2 メモリーケアに関わるブリッジの経験
1 メモリーブリッジの活動の概要	おわりに
2 継続ケア退職者コミュニティを拠点としたメモリーケアの実践	
2.1 高齢者対象住居・ケア施設へのメモリーケアの導入	

はじめに——認知症と孤立の問題

社会の少子高齢化は、高齢者人口割合の増加および高齢期の長期化という二つの変化を意味する。私たちは、退職後や子育て後の自由な時間を謳歌できることを願う一方で、心身の弱体化や不調を憂慮し経験しつつ人生の最終段階をどのように生きるのかという課題を重く感じることもある。高齢期の生活全体を支援する方法を考える上で、高度に発達した現代医療のみでは解決しきれない領域については、聴き取ること、観察すること、そして想像力を駆使することの重要性が認識されつつある¹⁾。その理由として、人々のウェルビーイングは文化的背景や個人的嗜好の影響を受けて多様であることや、人間の全体性に関する考察は量的分析のみでは解明できない部分が常に残るといった点があげられる。

たとえば、高齢期のウェルビーイングに関し研究を蓄積してきた老年心理学者バルテスらは、高齢者は辛いと感じる状況があったとしても、そのことを表現しない選択をすることがあるが、それは困っていないという態度を保つことに自尊心を感じているからだとして説明している (Baltes and Baltes 1990)²⁾。また、長期化する高齢期は、医療、社会、文化など様々な問題が絡み合う認知症 (Lock 2013) をはじめとして心身の不調と折り合いながら生きるライフスタイルに関する考察の必要性を示唆している。

こうした知見は、高齢者のニーズは、アンケートで問い合わせるのみでは必ずしも十分に掬い取ることはできず、工夫を凝らした聴き取りや参与観察の併用が不可欠だということを明示している。実際、高齢者のウェルビーイングに応える試みとして、経験に基づいて現代医療以外に補完医療を併用したり、様々なアクティビティを開発する試みが続けられている。こうした試みを記録し、議論の場を創出し、共有するために発信することによって、経験が知見として情報化され共有されていくと考えられる。

本稿は、アメリカ合衆国において、「メモリーケア」をキーワードとして高齢認知症者と交流する試みを続けている「ブリッジ」と呼ばれるボランティアの人々に注目し、高齢認知症者のウェルビーイングとケアすることの意味について検討する。資料収集および現地予備調査は、科学研究費基盤研究 (B) 特設分野

研究（ネオ・ジェロントロジー）「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究（2014-2016）（研究代表者：鈴木七美）の調査研究の一環として、フロリダ州オーランド、スチュアート、パームシティにおいて行った（2015年11月17日～12月3日）。「ブリッジ」たちは、高齢認知症者が社会的に孤立する傾向にあることを憂慮し、対面（face to face）の一対一の語り合いやタッチ（触れること）によって、コミュニケーションの道を拓くことを試みている。それは、経験に基づき、認知症者のウェルビーイングを高めるために行われてきた音楽やアートといった感覚に働きかける活動の一環といえよう。さらに、本研究において注目する点は、高齢認知症者とその周囲の世界、すなわち高齢認知症者自身、その家族、他の専門職者などを繋ぐ要素としての「ブリッジ」の側面³⁾と、メモリーケアの活動とブリッジ自身のウェルビーイング観との関連である。

1 メモリーブリッジの活動の概要

「メモリーブリッジ」の活動は、2003年に「もしも、わたしたちが、認知症の人々が生きている限り、繋がっていられたら」という問いから生まれた⁴⁾。メモリーブリッジの創始者で理事長であるマイケル・ヴェルデは、個人的な経験から、「長いお別れ the long goodbye」の過程というアルツハイマー病の捉え方は、あまりにシンプルであると考えていた。アルツハイマー病や認知症が進行する過程にあっても、人々は、親しさや喜びの瞬間を経験するために、新しい言語——語ることに、語られないこと、そして、アートによって表現されること——を学ぶことができると思っていたのである。

この着想から、メモリーブリッジ（かつては、メモリーブリッジ：アルツハイマーと文化的記憶のための財団）は、活動にあたって二つの主たる領域を設定した。第一は、一般社会におけるアルツハイマー病の理解を深めることに資する情報を提供すること、第二は、認知症の人々の孤立感を緩和させるために、他の人々と感情豊かに繋がることに向けたプログラムを創出することである。

これらの目的を実現するために、メモリーブリッジは2004年に非営利団体の資格を得て、以下の事業を行ってきた。

2004年に、スミソニアン・フォークライフ・文化遺産センター、および国会図書館と連携して、退役軍人のオーラルヒストリー・プロジェクトのために、認知症の退役軍人のインタビューを行う際のガイドを作成することに協力してきた。

2005年には、メモリーブリッジは、イリノイ州キケロのメモリーブリッジ・スクールイニシアチブを試行した。このイニシアチブは、高齢者対象生活支援付コミュニティ（アシステッド・リビング・コミュニティ assisted-living community）において、中等学校の生徒を学校の近隣に住む認知症高齢者と一対一で交流させるものである。12週間におよぶプログラムは、聴き取りや想像することを通して、生徒たちに認知症高齢者と様々な付き合い方があることを、また互いの接し方の可能性を示した。この試行が、各地のエージェントの注意を引いた。そして、2006年から2010年にかけて、シカゴ・メモリーブリッジ・イニシアチブ（CMBI）は、7,500人以上の中等および高等学校の生徒と認知症高齢者が、少なくとも三か月以上にわたって、一対一の関係で付き合い続けるカリキュラムを実施してきた。このカリキュラムにおいて認知症高齢者は、「共感をもって聴くこと empathetic listening」の技法を学ぼうと、若者たちの導き手（ガイド）あるいは教師として位置づけられた。2011年には、インディアナ大学の教育平和賞助成を受けて、この教育カリキュラムの哲学と方法を、南アフリカ共和国の大学教員、高等学校教員、ソーシャルワーカー、そしてコミュニケーション・セラピストに伝え始めた。

メモリーブリッジが開発した方法は、2006年に、イリノイ州の長期介護を必要とする高齢者に関わるロングタームケア委員会の革新的プログラムにも「メモリーケア」として、取り入れられた。メモリーブリッジの経験は、2008年のPBSドキュメンタリー「ここに繋げる橋がある There Is a Bridge」や、DVDによって発信されてきた。2012年に、フロリダ州のトレジャー・コースト・ホスピスとメモリーブリッジは、フロリダのホスピスと緩和ケア協会からシナジー（相互作用）賞を受けた。そして、2013年に、メモリーブリッジはフロリダ州パームシティのケア施設の一つAで、認知症高齢者と交流するトレーニングを提供し始めた。これまで、4回の3日半にわたる、「私はブリッジ I Am a Bridge」のトレーニングが、かれらの「バディ」（メモリーケアに参加するケア施設に居住

する認知症高齢者)を定期的に訪問する、多くの「ブリッジ」を育ててきた。

2013年に、メモリーブリッジは、世界各地から参加した12人のために5日間の夏季トレーニング・リトリートを提供し始めた。インディアナ州ブルーミントンのチベット・モンゴリアン・仏教徒文化センターで開催されたメモリーブリッジ夏季トレーニングでは、認知症者を、学びの中心的資源と位置づけた。2015年に、メモリーブリッジは、7つの国々から90名以上の申請書を受けた。こうした状況は、メモリーブリッジを学ぶことによって、認知症者を支援する人々(支援専門職者、支援専門職者の管理者、高齢者の日常生活のコーディネートを生活管理者、レクリエーション組織者、そして美術による治療を行う療法士、活動組織者(アクティビティ・コーディネータ)、施設付き牧師(チャプレン)、ホスピスで働く人、など)が、認知症者や周囲の人々の生活の質の向上に貢献しているとみられていることを示している。

2015年5月に、メモリーブリッジは、「共に居る being with」コミュニケーションの理論と実践について理解を深める目的で、ロンドンのホスピス運動の根拠地の一つであるセント・クリストファー・ホスピスから招待を受けた。また、10月には、西オーストラリア・アルツハイマー協会に招聘され、オーストラリアのパスで10日間にわたる発表とトレーニングが実施された。

このようにメモリーブリッジは、アメリカ合衆国および世界各地で、認知症者とのコミュニケートを続ける「共感をもった聴き取りと交流」の方法を議論し、ブリッジとバディの関係に焦点をあててケアの意味を問い直してきた。今回の調査地は、それらの中でも、2013年から、高齢認知症者との交流に関する集中的トレーニングを提供し始め、メモリーケアの実践を試みてきたフロリダ州パームシティの継続ケア付き退職者コミュニティAである。

2 継続ケア退職者コミュニティを拠点としたメモリーケアの実践

2.1 高齢者対象住居・ケア施設へのメモリーケアの導入

フロリダ州パームシティの継続ケア退職者コミュニティ(CCRC Continuing

Care Retirement Community 以下では CCRC と略記)⁵⁾ では、2013 年に、メモリーブリッジと連携した認知症に関わる勉強会の場を提供し実践の試みを始めた。そのきっかけの一つは、コミュニティの施設のディレクター B が、メモリーブリッジに関する情報を得て、興味を抱いたことである。CCRC とは、心身のニーズにしたがって、慣れ親しんだ生活環境やコミュニティのなかで、住む場所を変えることができる、高齢者対象住居施設である。車社会といわれるアメリカ合衆国では、とりわけ 20 世紀後半のベビーブーム世代が、郊外の一戸建てで子育てをするライフスタイルから、高齢期に車を手放しても交通手段や交流が確保される住環境が模索され、多くの CCRC が作られてきた。

フロリダ州パームシティは、高齢者（65 歳以上）人口比率が 27% を超えており、アメリカ合衆国の中で高齢化率が高いフロリダ州（17.3%）のなかでも、高齢者が住みやすい環境への関心が高い。パームシティは、年間を通して温暖な気候や安全性が高いことでも知られており、退職後の高齢者の移住先としても注目されてきた。この地域では、ヴェロ・ビーチのホスピスや美術館、トレジャー・コースト・ホスピスにおいても、「メモリーケア」やアート、音楽などを総合的



写真 1 継続ケア退職者コミュニティ（CCRC）の庭と道（フロリダ州パームシティ）

に用いて認知症者との交流の試みが精力的になされている。

Bは、修士号をもつソーシャルワーカーとして、ニュージャージー州の医療者の教育部門をもつ病院で務めていた。高齢者との関わりも多く、常に人々が、自分の居場所と感じられるところで年を重ねるという「エイジング・イン・プレイス aging in place (aging-in-place)」に興味を抱いてきた。「エイジング・イン・プレイス」という語は、社会の高齢化がリスクとして強く認識された20世紀後半から、気に入ったところで年を重ねるという意味で用いられてきた(Stafford 2009a; 松岡 2011; 鈴木 2015)⁶。Bは、病院で治療を受け続ける患者たちの「エイジング・イン・プレイス」に資する活動プログラムの開発に携わってきた。そして、このCCRCが創設された23年前から一貫してこの施設の運営に関わってきた。

このCCRCは、高齢者対象一戸建て住居(ヴィラ)30戸、退職者用コミュニティ(アパートメント)205戸(生活支援付 一日に1食が提供される)、アシステッド・リビング(ケア付き施設)20床、ナーシング施設36床などを擁す



写真2 CCRC内を歩いて移動することが困難な人々が利用するカート(フロリダ州パームシティ)



写真3 庭の各所に設けられているあずまや（フロリダ州パームシティ）



写真4 退職者コミュニティのアパートメント（フロリダ州パームシティ）



写真5 拡張看護（エクステンデッド・ケア）を受けられるナーシング棟の共有スペース（フロリダ州パームシティ）



写真6 ナーシング棟の談話室（フロリダ州パームシティ）



写真7 CCRC内のプール。高齢者を含め訪問中の家族や友人など、様々な世代の人々が利用する場所の一つである（フロリダ州パームシティ）

る複合的施設である。同施設では他に、プール、ジム、クリニックなどを備え、緊急対応、移動支援、社会活動、ハウスキーピングなどを提供している。また、一般家庭への支援の拠点でもある。NPO 法人によって運営されており、原則として62歳以上の人々が入居することができる⁷⁾。

この施設を拠点として高齢者のウェルビーイングを追求するうえで、Bは一貫して、高齢者の「エイジング・イン・プレイス」を念頭においてきた。CCRCのなかで必要に応じて住む場所を変えていく人々のために交流に資する様々なプログラムを作成した過程で、Bは、年をとるにしたがって、高齢者たちも、また自分自身においても、考え方や価値観が変化してゆくことを実感するようになった。そもそも年齢によって「高齢者」というカテゴリーで人々を一括りに捉えることは適切ではないが、Bは実践のなかで、年代によって人々のニーズが変化していく様子を観察してきたのである。高齢期に人々は何を求めるのかという、人々の価値観に基づくニーズを見出すことに、Bは、「自分自身のニッチ（適所、居場所）を見出した」と述べている。

さらにBが、高齢者のウェルビーイングの課題として強く意識してきたことは、認知に問題のある高齢者（アルツハイマー病や認知症、そして認知症の傾向のある人々）の孤立の問題である。認知症に陥ると、高齢者は周囲の人々との交流を絶たれる傾向がある。それは、認知症が、脳の退行であり、一人の人間としてコミュニケーションをすることができなくなるとみなされているからである。その背景として、自立していること（independent）や自律（autonomy）が、元気であることや若いことと関連づけられ高い価値が認められているアメリカ社会の状況があると、Bは考察している。身体のみならず、知的・感情的な能力が失われてゆく病をもつと判断されると、人々は、かつての隣人からも、家族からも忌避されたり（avoidance）、回復不能な「長いお別れ」の過程にあるとみなされてしまうというのだ。

メモリーケアについて情報を得ると、早速Bは、CCRCにおいて、メモリーケアを学び実践する場所を提供することにした。まず、比較的重度の高齢認知症入居者の家族に、メモリーケアを試みる希望があるかを問い合わせ、希望者には認知症者に関する情報——どこで働いてきたか、子どもがいるか、何が好きかなど——を可能な範囲で詳細に紙面にて答えて貰う。メモリーケアを行うブリッジたちは、当初まったく情報がなかったバディ（高齢認知症者）に関し、メモリーケアを始めるまでに、その情報が与えられるしくみとなっている。ブリッジたちは、すくなくとも3か月間そのバディへの訪問や働きかけを行う。こうしたメモリーケアの一つ一つのケースを積み重ねることは、経験に基づく認知症者支援に関する質的研究の過程に不可欠であると考えられている。

2.2 メモリーケアに関わるブリッジの経験

この施設でメモリーケアに関わる人々は、施設で開催されるガイダンスも含め、メモリーケアについて学んだ人々である。これまで、4回実施された3日半にわたるトレーニングは、「バディ」（メモリーケアを受ける住人）を定期的に訪問する、多くの「ブリッジ」同士が出会う場でもあった。

施設内で勤務する者の中でメモリーケアに携わる者として、介護（ナーシング）部門の責任者、看護師、生活管理者（オキュペーション・コーディネータ）、リハビリテーションを行う理学療法士（フィジカル・セラピスト）、言語聴覚士

(スピーチセラピスト) などがいる。かれらは、施設内で、メモリーケアを行う環境を整え、実践し、監督する。

外部のブリッジは、フレンドリー・ビジティング⁸⁾ などとして高齢者を訪ねるボランティアと同様に、自分のペースで高齢者を訪ねるが、特徴は、「一対一」の対面で行うことである。メモリーケアの創始者マイケル・ヴェルデは、ケアについて、一時的に一方的な支援を与えることではなく、「共にいること being with」という考え方を提唱し、“Dis-ease” とよばれる、認知症による孤立をもたらすような関係性を変換させることに繋がる活動と捉えている。ブリッジたちの多くは、メモリーケアを通して、既存の宗教との関わりはない活動ではあるが、スピリチュアルな経験をすることにより自分がどのように影響を受けたり学んだりするのか、という視点や興味を共有している。

この CCRC の創設当初からメモリーケアに関わってきた C は、インド南西部のキリスト教信者の家庭で育ったが、大学時代からは、故郷の環境を思い出させる海に近いこの町で、先に移住した兄を頼って暮らしている。町に支店のある大手の証券会社で働きながら、ホスピスなどで訪問ボランティア活動を続けてき



写真 8 メモリーケアの活動に参加している「ブリッジ」の一人、フィジカル・セラピスト (左から 4 人目) とともに、多目的ルームで体操する高齢認知症者たち (フロリダ州パームシティ)

た。メモリーブリッジを導入したホスピスで、メモリーケアについて知識を得たCは、CCRCでメモリーケアを実践しようと試みるBに協力するようになる。Cは、仕事の経験を生かして、とくにファンドレージングのプログラムの開発、実施および運営に関わっている。

仕事に就いていても、退職した後も、Cにとって、アメリカのこの地に住み続けることは「エイジング・イン・プレイス」を意味してきた。人口23,000人の町は、年齢の中央値47歳（全米37.4歳 2014年国勢調査）で、落ち着いたのある場所であると感じる。しばしば出かけるカフェには、いつも決まって座るテーブルもあり、話し相手もいる。だが、ホスピスのボランティアに加えて、メモリーケアを始めたCは、「今、私にできることがある」「自分は、まだ何か価値がある」と感じるようになったことに、少し驚きを感じているという。それは、60歳を超えた自分でもできることがあるというばかりではなく、60歳まで生きてきたからこそ初めてわかることがあり、今後も自分のいる世界は広がっていくという確信を得たからだ。

Cは、見返りや結果を期待することなく、「アガペー（愛餐 love feast 友情の



写真9 季節ごとの催しなど様々なイベントが行われる多目的のルーム。談話室としても利用されている（フロリダ州パームシティ）

酒宴)・ラブ」という友人や信条を同じくする者同士が楽しく食事するような、そうした瞬間を経験したり、作り出すことに関わっている感覚をもっている。そうした瞬間は、バディがブリッジであるCとの小さな共通点を発見し、そこから思い出を愉しむ様子を見出した時などに経験したものである。たとえば、Cが大好きなブランドの靴を見たバディは、急に、楽しかった昔の話をし始める。夫が亡くなってしまい寂しい思いをしていたバディだが、そのブランドはかつて夫がプレゼントしてくれた靴のものと同様であり、一時、バディを夫との思い出に向かわせたのである。

一方、Dの経験は、少し極端なものである。前述したように、ブリッジは、バディの情報を知らずにくじを引いたようにその担当となる。Dは、悪評高いEという老人を訪問することになったのだ。Eは、常に、罵詈雑言を施設のスタッフや、家族に浴びせていた。Dに対しても、セクシャル・ハラスメントといえるような発言を繰り返したが、3か月間交流を試みるという原則にしたがって、Dは訪問を続けた。その過程で、Eは少しずつ変化を見せたのである。Dの観察によれば、訪問を受けることは、誰からも避けられ孤立してきたEに対して、スタッフが一目置くようになるきっかけとなったという。また、Dが家族の住むパリに旅した時に送った手紙がEにしばしば届けられたことは、さらに、外部との交流がほとんどなくなっているEを喜ばせたと考えられる。

Dはまた、Eが混乱している時に、顔を手で挟み、こめかみに触れながら安心させることを試みていた。何故なら、D自身が、幼い頃は大人からそのようなタッチ（触れること）によって、安心感を得た記憶があるからである。

D自身は、メモリーケアの活動をしているさなかに、家族との関係が断たれるという経験をしており、3か月間の約束のために通い続けたことが、自分を新しい環境で生きさせたと感じるという。長年パリで仕事してきたDは、Eの知人と偶然知り合ったおかげで、フランス語で語り合う時間ももてるようになった。Dにとって、フランスで美術史に関わる仕事をしたり、家族と暮らしてきたことが、今までの大事な人生経験と「エイジング・イン・プレイス」を構成しており、そこからの転換は現在も進行中である。だが、Dが、メモリーケアの活動とともに、自分自身のエイジング・イン・プレイスを希求するためには、自分が変わることも必要だと感じるようになった。頭のみで考えることはむしろ自分の変化を

阻害するので、行動したり感じたりすることにオープンでなければならないと考えているという。

この CCRC にメモリーケアを導入した B が、ケアのなかでも重視してきたことは、「ハグする」（抱きしめる アメリカ合衆国では親しい者のあいだで男女を問わず挨拶としてしばしば行われる）ことに象徴されるように、タッチすることだ。人は、幼い頃、大人たちから顔を挟んで語りかけられたり、抱きしめられたりすることがあるが、大人になると上の世代の人々から受けたそうした機会は減っていく。だが、B によれば、そうした瞬間は、「一人ではない」というメッセージを伝える効果があるというのだ。「そこに誰かがいる」と感じ安心することが大切だという。B は、高齢者ケアをすることによって、バディたちに対し、「弱いところをもって（vulnerable）くれてありがとう」と感じるようになったという。自分に対しても、他者にたいしても、「判断 judgement」を控え、毎日の出来事に一つ一つ向き合う。最近では B と C は、ほとんど毎日電話をかけ合っている。それは、メモリーケアを考えることをとおして、C を家族とも仕事仲間とも違う、人生に関する仲間とを感じるからだという。

おわりに

本稿は、高齢化するアメリカ社会において、高齢認知症者の感情的孤立を防ぎ、周囲の世界と交流することを目的として行われているメモリーケアの活動に注目したものである。

認知症に関しては、現代科学・医療の発展という状況においても、いまだ解き明かされていない部分があり、また、認知症者がどのように感じているのかという主観性に関しては、個人の多様性も含め困難な研究課題となっている。

こうした状況において、本稿で扱ったメモリーケアの活動は、音楽やアートなど人間の感覚に働きかけるものとして経験に基づき実践されてきたケア活動の一環でもある。この活動の特徴として、対面で行う一対一の語り合いを、中心的な実践としていることがあげられる。声やタッチ（触れ合い）をも重視するこの活動においては、現代社会で利用されているソーシャルメディアではなく、対面の交流が不可欠であると認識されているのである。

この交流の試みは、ほとんどの場合、異なる世代間で行われている。「ブリッジ」と呼ばれる人々は、「バディ」と呼ばれる認知症高齢者に関し、情報を収集し、観察したうえで、話題を提供する。タッチ（触れ合い）を行うのは、人々が幼い頃に経験したであろうことを実践しようという考えに基づいている。つまり、思い出となっている可能性のある様々なことがらを接ぎ穂として、交流を図るのである。そうした機会をきっかけとして、バディが思い出を語ったり、感情を表現することがある。ブリッジたちは、バディがうれしいと感じることをはじめとして、感情の動きをみつめる。

だが、認知症高齢者であるバディは、ブリッジにとって理解できないことを述べたり、家族や看護師など他の人々にも侮辱的な言葉や態度を示すこともある。ブリッジたちが肝に銘じていることは、異なる認識をもつという理解から、ブリッジたちは、自分たちの価値基準だけに基づいて「判断しないこと」、予想される反応がなされることを「期待しないこと」、「見返りを期待しない」ことである。

それでは、どういうことが、ブリッジが印象をもっている事柄なのか。思い出語りは、しばしば「ブリッジ」にとって、自分が知らない幼い頃の世界の歴史や習慣を学ぶ時間となるという。人類学・民俗学研究では、認知症高齢者の思い出を聴くこと、料理など得意の活動を一緒に行うことを通して思い出を伝えてもらうことなどに関し、ケア者の知識や感覚を変化させることに繋がるという報告がなされてきた（六車 2012, 2016）。人間は生まれた時から老いて死ぬまでの過程において、他の人々の手を借りなければ生きられない存在だが、一人の人間の一生に関しても、他の世代の人々の記憶と合わせることで、人は、初めて少しずつ全体像が把握できる感覚を得ることができ（Anderson 1991: 204）。他の人がもつ情報に助けられて初めて私たちの自分史はかたちをなし、自分を世界に位置づけられるようになるというのだ。実際、本研究における「ブリッジ」は、認知症高齢者をバディという言葉だけでなく、「ガイド」、「教師」とも表現している。

高齢認知症者の人生に伴走し、感情を聴き取ることは、ブリッジたちに何をもたらしたのか。高齢者ケア施設におけるプログラム作成に「自分のニッチ」を見つけてきたBは、高齢認知症者のためのメモリーケアを監督することに伴って、年を重ねるとともに、人生と価値観を問い直すようになったと感じている。ま

た、仕事で成功を収め欲しい「物」は手に入ったと思っていたというCは、年を重ねることによって自分もまた新たなことに巡り合うことができる、と感じている。そして、Dは、高齢認知症者のブリッジという活動、語り合いが、落ち込んでいた闇から自分を救い上げてくれたことがあると報告している。「ブリッジ」たちも、常に人生の歩みのなかにあり、「メモリーケア」の時間は、自分の歩みを見つめること、時には自分を生きながらえさせることにも繋がっている。

このように、メモリーケアについて語り合う人々は、一つの現場を構成しているといえよう。近年文化人類学において、現場の意味は、「もともと場所があるのではなく、自分が問題に主体的に関わること、考えることで、はじめてそこが『現場』としての意味をもつ」（小田他編 2014: 147）と説明されているが、メモリーブリッジの経験は、力強く参加できる者だけが参加するのではなく、マイノリティや弱者の声が届くような現場をいかにして構成するのかについて問いかけられている。家族とも違う、知人とも違う、新たな「人生の友人」を得た、と語るブリッジたちは、私たちが繋ぐ現場の多様性と可能性を示唆している。

本研究に関し、近年示唆されている二つのテーマを参照しつつ深化させることが課題としてあげられる。第一の課題は、相互依存（interdependent）に関するものである。本調査でみられたように、ケアする・されるという関係性にとどまらず、現場に関わる人々の新たな関係性が生まれることが人々のウェルビーイングに影響を与えることが、実践の場で注目されている（Stafford 2009b; Suzuki 2015; 信田 2015, 2016）。「自律（autonomy）、参加（participation）、自立（independence）への戦いと矛盾しないものとしてのケア」（Jeppsson Grassman and Whitaker (eds.) 2013:135）とその環境について考察するうえで、本研究は視点と資料を提示できると考えられる⁹⁾。弱いところや不調を感じつつも、高齢者が力を合わせて共に暮らしてきた毎日について、「わたしたちは共に努力して進んでいく we work」と表現した言葉（Torgé 2013: 122–123）も、ケアと共に生きる関係性について考える上で示唆に富んでいる。本調査で扱った場は、高齢者にとっては、生活と治療やケアを受けることが同時に可能となっている場である。ブリッジは、専門職者として、あるいはボランティアとして、治療やサービス、メモリーケアを提供する中で、相互依存的な関係性を経験する。CCRCは、専門職者、ブリッジ、パディが多様な関係性を結ぶことに開かれた新しいコモンズ（共有地）を備えた場

所としてデザインされているのである。

第二の課題は、コミュニケーションに関するものである。現在、メモリーケアにおいて、認知症高齢者が語り感情を表すというコミュニケーションが、孤立を減じることに繋がるという認識のもとで、語り合いというケアが目的とされている。だが、最近の研究では、被ケア者のウェルビーイングの充実という観点から、一人である時間をもつ自律性や、支援者からのプライバシーを保つ場としての「フリーゾーン」の確保の重要性も議論されるようになってきている (Jeppsson Grassman and Whitaker (eds.) 2013: 131)。実際、筆者が研究調査 (スイス 2014年6月～7月)¹⁰⁾ を行った高齢認知症者対象デイケア施設で、アクティビティ・コーディネータは、高齢者たちに活動と休止のリズムを伝えることの重要性とその方法の模索について言及していた (鈴木 2016)。そこでは、高齢者たちもコーディネータもともに、一つの活動を遂行した充実感を感じ、その後安心して休息できる環境が模索されている。

マイノリティや「弱き者」を一方向的に支援するのではなく、関わり合う現場で多様な人やエージェントを繋げる実践や、現場で認識される共に生きることの意味について、聴き取りや伝えることを重要な要素とする人類学研究¹¹⁾ の一環として追求してゆくことを、今後の課題としたい。

謝 辞

アメリカ合衆国フロリダ州に関する本研究調査に関し、フィリップ・スタッフォード (Philip Stafford) 氏 (インディアナ大学文化人類学部併任教授／インディアナ大学エイジング・コミュニティセンター長 (Center on Aging and Community) ／インディアナ障害・コミュニティ研究所長 (Indiana Institute on Disability and Community) ／科研 (B) 「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」(2014–2016) (研究代表者：鈴木七美) の国際共同研究者から貴重な情報を提供していただいた。「メモリーブリッジ」の代表者マイケル・ヴェルデ氏は、メモリーケアを実施している機関における研究調査のためのインタビューおよび参与観察を認めてくださった。パームシティにおいては、継続ケア退職者コミュニティ (CCRC) およびホスピスに関わってきた方々が、資料を提供するとともに、メモリーケアに関する議論に参加くださった。査読をしてくださった方々には、貴重なコメントをいただいた。本稿執筆にあたり協力いただいた方々に謝意を表したい。本研究調査は、科学研究費基盤研究 (B) 特設分野研究 (ネオ・ジェロントロジー) 「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニ

ティ』構想と実践の国際共同研究」(2014-2016) (研究代表者: 鈴木七美) (JSPS 科研費 JP26310109) を受けて行ったものである。

注

- 1) 鏡味は、ギアツ『現代を照らし出す光』訳者あとがきにおいて、「ギアツは『なじみのない心性の動きに想像的に分け入っていくこと（そして異質な心性が自分のなかに入ってくるのを許すこと）』を提唱し、そうした想像力を鍛える役割を果たしてきた人類学を支持する」と述べて、人類学と想像力の関わりに注意を喚起し（ギアツ 2007: 334-335）、2015年には、人類学と想像力をテーマとしたシンポジウムを企画開催した（日本文化人類学会研究成果公開発表シンポジウム「人類学的想像力の効用」（金沢市しいのき迎賓館3階セミナールーム B 2015年11月8日））。
- 2) 健康的、社会的そして経済的な資源が減じても、主観的ウェルビーイングは保たれる場合があると観察していたバルテスらは、その理由として、自律性が危機にさらされたときにセルフエスティームを保持する戦略という以外に、高齢者がレジリエンス（回復力、弾性）と適合（環境が良好とはいえなくても満足感を保つ）能力をもつことをあげている（Baltes and Baltes 1990; Daatland 2005: 374）。
- 3) 本研究の基礎となっている国立民族学博物館機関研究プロジェクト「ケアと育みの人類学」（2011-2013）（研究代表者: 鈴木七美）では、高齢期や子育てに関わる活動に注目し、ケアの意味の把握と、ケアは何を育てることを志向してきたのかについて考察を重ねてきた（Suzuki 2013）。その方法の一つとして、現代社会における高齢期や子育て環境整備の課題に関連して、専門職者、非専門職者を問わず、多様な要素や活動を「繋ぐ」働きを追ってきた。そのことを通して、人々の多様なウェルビーイングに資する要素を浮かび上がらせるとともに、実践に資するエージェントのありかたを提示してきた（鈴木 2012）。
- 4) 本節は、現地調査における関係者の説明と調査後のやりとり、および資料として収集したメモリーブリッジの講習会で用いられているハンドアウト、講演会などの案内から構成している。
- 5) アメリカ合衆国では、20世紀半ばから、一人では生活が難しくなった高齢者を対象とするナーシングホーム（老人ホーム）の環境が見直されるようになった。社会保障法の改正（1965年）によって医療保障制度の整備が進み、メディケア（高齢者や障害者を対象とした医療保険制度）とメディケイド（医療扶助）を財源基盤として医療施設をモデルとしたナーシングホームはその多くが営利企業によって運営され発展してきた。近年、高齢者の重層的なニーズに応じて、以下のような施設が展開されている。低所得者を対象とした高齢者専用集合住宅、多様な規模の老人ホーム、ケア付き住宅、アメリカ合衆国の特徴的な居住コミュニティとして成長してきたリタイアメント（退職者）・コミュニティ、そして、ケア付き住宅やナーシングホームを同一敷地内に設置したライフケア・コミュニティあるいはCCRCである（仲村・一番ヶ瀬編 2000: 172-177; Golant & Hyde (ed.) 2008: 3-45; 鈴木 2010: 170; Suzuki and Hui 2014）。20世紀後半には、社会の高齢化の認識のもとで、高齢期の多様なウェルビーイングに配慮した施設が模索され、CCRCが各地でつくられるようになった。多くのCCRCは、病院や大学と同様に、非営利組織として運営されている。
- 6) 「エイジング・イン・プレイス」は施設入居ではなく自宅で過ごすという意味を込めて使われる場合もあるが、施設であれ長年住み慣れた家であれ、「地域居住」（松岡 2011）というキーワードに表現されるように、高齢者が、地域やコミュニティに包摂されて暮らせるように、環境を検討する研究や実践において、とくに注目されてきた語である。
- 7) 生活支援付コミュニティで充実した生活を目指すためには入居金および毎月の生活費として資金を用意する必要があるが、退去に際しては、最大80%返還される。一人用のアパートメント（写真4）の場合、入居費180,000ドル、毎月の経費は（食事1回および近隣への送迎を含む）3,500ドル（2015年12月現在）である。介護が必要であるナーシング施設の場合は、メディケアを受けてより多くの人が利用しやすい設定となっている。入居に際しては、リバースモーゲージを含め、各人の状況に応じた移動計画が詳細に検討される。
- 8) 「フレンドリー・ビジティン」は、施設に居住する高齢者のために、ボランティアが行

- う訪問のことである。たとえば、カナダの日系の人々が多く入る施設では、「日本食」の提供や日本文化に関わる活動が、フレンドリー・ビジティングのアクティビティとして行われてきた（鈴木 2010: 169; 傳法 2010: 76-79; Suzuki and Hui 2014）。
- 9) 高齢期のウェルビーイングに資するケアの関係性に関しては、国立民族博物館機関研究プロジェクト「ケアと育みの人類学」（2011-2013）（研究代表者：鈴木七美）（注1も参照）において視野に収めて議論してきた。その成果は、北欧スウェーデンにおいて制度に基づいた福祉とともに人々の日常生活における「相互依存」や「ボランティア」のありかたについて提示されている（Jeppsson Grassman 2014: 151-160）。エヴァ・ジェブソン・グラスマン（Eva Jeppsson Grassman）氏（リンシェーピング大学社会福祉学部名誉教授／スウェーデン国立高齢化高齢期研究所（NISAL）元所長）は、上記プロジェクトに引き続き、科研「多世代共生『エイジ・フレンドリー・コミュニティ』構想と実践の国際共同研究」において国際共同研究者として、北欧の高齢期のウェルビーイングと福祉や相互依存の関係性について研究を進めている。
 - 10) 科学研究費基盤（C）「スイスにおける高齢者のウェルビーイングと代替医療の適用に関する文化人類学研究」2013-2015（代表者：鈴木七美）による研究調査。
 - 11) 南は、人類学や民俗学がフィールドワークで行ってきたことの意味について、「人類学や民俗学がフィールドワークで行ってきたことは、長期の参与観察という形で異文化や他者と向き合い、時間をかけて語りに耳を傾けることでした。そこには相手のことをより深く理解したいという共感と愛情があります。また、それによって人間の文化の多様性を知り、自らによって立つ文化を相対的に見る視点を得てきました」と説明し、その方法と姿勢の意義を、「育児と介護の現場におけるフィールドワークから見出されたミクロな視点を紹介し、望ましい社会を展望するというマクロな視点に架橋していければ」と展望している（南 2015）。本研究で注目した、実践者「ブリッジ」たちの活動においては、「共感」豊かな「交流」の試みによって、「全体としての人間」を観察し、「パティ」のウェルビーイングの充実を図り、同時に、「ブリッジ」たち自身の世界が問い直されている。南が述べるような人類学・民俗学の方法は、実践の場における毎日の試みや、得られた情報を抽象化し文化を相対化して、次の実践を構想する道筋を考える作業において、実践者と研究者の伴走に不可欠な要素を含むと考えられる。

参考文献

- Anderson, B.
1991 *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. Brooklyn: Verso（初出は1983年、Brooklyn: Verso）.
- Baltes, P. B. and M. M. Baltes
1990 Psychological Perspectives on Successful Aging: The Model of Selective Optimization with Compensation. In P. B. Baltes and M. M. Baltes (eds.) *Successful Aging: Perspectives from the Behavioral Sciences*, pp. 1-34. Cambridge: Cambridge University Press.
- Daatland, S. O.
2005 Quality of Life and Ageing. In M. L. Johnson (ed.) *The Cambridge Handbook of Age and Ageing*, pp. 371-377. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- 傳法清
2010 「広げる——日系高齢者施設のアウトリーチ」鈴木七美他編『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』pp. 69-84, 東京：御茶の水書房。
- クリフォード・ギアツ
2007 『現代を照らし出す光——人類学的な省察』鏡味治也・中林伸浩・西本陽一訳, 東京：青木書店。
- Golant, S. M. and J. Hyde
2008 *The Assisted Living Residence: A Vision for the Future*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.
- Jeppsson Grassman, E.
2014 The Question of Civil Society in a Scandinavian Welfare State: Focusing on Older

- People in Sweden. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies*. SES No. 87: 151–160. Osaka: National Museum of Ethnology. (Internet, 30th April 2016, <http://hdl.handle.net/10502/5290>).
- Jeppsson Grassman, E. and A. Whitaker (eds.)
 2013 *Ageing with Disability: A Lifecourse Perspective*. Bristol: Policy Press.
- Lock, M.
 2013 *The Alzheimer Conundrum: Entanglements of Dementia and Aging*. Princeton: Princeton University Press.
- 松岡洋子
 2011 『エイジング・イン・プレイスと高齢者住宅—日本とデンマークの実証的比較研究』東京：新評論。
- 南真人
 2015 「公開講演会『育児の人類学、介護の民俗学』」の趣旨（みんぱく公開講演会「育児の人類学、介護の民俗学—フィールドワークによる再発見」主催：国立民族学博物館・日本経済新聞社 日経ホール（東京）2015年11月13日）3頁。
- 六車由実
 2012 『驚きの介護民俗学』東京：医学書院。
 2016 「聞き書きで介護の世界が変わっていく—介護民俗学の実践から」西岡圭司編『季刊民族学』156: 69–75, 吹田市：千里文化財団。
- 仲村優一・一番ヶ瀬康子（編集委員会代表）
 2000 『世界の社会福祉9 アメリカ・カナダ』東京：旬報社。
- 信田敏宏
 2015 「『ホーホー』の詩ができるまで—ダウン症、こころ育ての10年』東京：出窓社。
 2016 「心に寄り添う子育てとは？—遊びと学びのすごろくワールド」西岡圭司編『季刊民族学』156: 62–68, 吹田市：千里文化財団。
- 小田博志・関雄二編
 2014 『平和の人類学』京都：法律文化社。
- Stafford, P.
 2009a *Elderburbia: Aging with a Sense of Place in America*. Santa Barbara: ABC-CLIO.
 2009b *Aging in the Hood*. In J. Sokolovsky (ed.) *The Cultural Context of Aging*, pp. 441–452. Westport: Praeger.
- 鈴木七美
 2010 「渡る—世界や宇宙と響き合う物語へ」鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編著『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』pp. 163–177, 東京：御茶の水書房。
 2012 「デンマークにおける『障害のない社会』構想とノーマライゼーション—余暇活動としてのフォルケホイスコーレの展開」鈴木七美編『「障害のない社会」にむけて—ウェルビーイングへの問いとノーマライゼーションの実践』SER No. 102: 77–98, 大阪：国立民族学博物館。(Internet, 30th April 2016, <http://hdl.handle.net/10502/4657>)).
 2013 Preface. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Aging and Well-being: Searching for the Space and Time to Cultivate Life Together*. SES No. 80: 1–19, Osaka: National Museum of Ethnology. (Internet, 30th April 2016, <http://hdl.handle.net/10502/4960>)).
 2015 「高齢期のウェルビーイングと多様な住まい方—変わりゆく人の生（ライフスタイル）から考える」『人間文化』22: 2–12, 東京：人間文化研究機構。(Internet, 30th April 2016, <http://www.nihu.jp/sougou/jouhou/publication/ningen.html#22>)).
 2016 「スイスにおける養生文化とエイジフレンドリー・コミュニティ」公益社団法人日本薬学会 (Internet, 30th April 2016, <http://www.pharm.or.jp/highlight/index.shtml>)).
- Suzuki, N. and T. Hui
 2014 Development of a Life-care Community as a “Town” Enriched with Diverse Ethnic Cultures: Focusing on the Cooperation of People Having Chinese and Japanese Cultural Backgrounds. In N. Suzuki (ed.) *The Anthropology of Care and Education for Life: Searching for Resilient Communities in Multicultural Aging Societies*. SES No. 87: 129–

鈴木 高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動

147, Osaka: National Museum of Ethnology (Internet, 30th April 2016, <http://ir.minpaku.ac.jp/dspace/handle/10502/5289?locale=en>)

Torgé, J.

2013 Ageing and Care among Disabled Couples. In E. Jeppsson Grassman et al. (eds.) *Ageing with Disability: A Lifecourse Perspective*, pp. 109–127. Bristol: Policy Press.